徐京植の著作を通じて見た韓国社会、文学、その影響と刺激[1]

権晟右(淑明女子大学校韓国語文学部)

１．　はじめに

私が心より深く尊敬する徐京植先生の停年記念の学術フォーラムで、ズーム(ZOOM)という手段ではありますが、このように発表させていただけるのは、大きな喜びであると共にやりがいでもあります。私は韓国ソウルにある淑明女子大学校で韓国現代文学の講義をおこなっている文芸評論家の権晟右（クォン・ソンウ）と申します。本日のこの時間は、私の学問的な歩みの中でおこなわれてきた、いかなる学術大会の発表よりも私自身に格別な思いと高揚感を与えてくれます。何より、このオンラインの空間にご一緒してくださっているすべての方々に深い連帯と友情の心をお伝えしたいと思います。

私はこの発表で、徐京植教授の論稿や書籍が、韓国社会において受容され、紹介される意義とその脈絡について概観し、文学というプリズムから、徐京植による執筆活動について調べてみようと思います。その中で、徐京植教授の著作が私に与えてくれた思いと学び、刺激、

---

[1] 私は今まで、徐京植教授の本と文を書くことを主題に様々な文を発表したことがあります。その目録は下記のとおりです。この文は、下に紹介した論稿のうちから、この学術大会の主題に則した内容のものを修正・補足して再構成したものです。それは何よりも、日本の学者、読者の方々に、韓国の批評家が徐京植をどのように理解し、そして受容したのかについて、紹介したかったという意図からです。

①「亡命、ディアスポラ、そして徐京植」、『実践文学』2008 年夏号。

②「苦悩と知性：徐京植の最近の執筆活動と思惟について」、『世界韓国語文学』4 号、2010 年 2 月

③「論争と自尊：徐京植の『言語の監獄で』について」、『クリティカ』 5 号、2012 年 2 月。

④「彼にとって文学とは何か?：徐京植の「詩の力」に対するいくつかの考え」、徐京植の『詩の力』(ソ・ウンヘ訳、玄岩社、2015 年)の解説。

⑤「在日ディアスポラ知識人のエッセイに表れた民族主義／脱民族主義：姜尚中と徐京植を中心に」、『私たちの文学研究』 55 号、2017 年 7 月。

⑥「孤立を耐えて本を読む：村上春樹と徐京植のエッセイについて」、『黄海文化』 102 号、2019 年 3 月。

⑦「私が出会った在日韓人文学、その魅力と大切な刺激：徐京植・金石範・金時鐘」、『韓国文学翻訳院主催　在日韓人文学シンポジウム資料集』、2019 年 4 月(『非情城市で出会った青みがかった夕方』、ソミョン出版、2019 年)。

そして魅力についても所々で言及してみようかと思います。ただし、大学で停年を迎えることになる喜寿の徐京植教授が著した 30 冊余りに達する著作、その知的遍歴と実践を、この 1 つの文章に整理し、意味を付与するのは不可能なことです。なぜなら、徐京植教授が拡げた思惟の振幅が非常に深くて広く、そして多彩であるためです。そのため、この発表は、徐京植の論稿と書籍の中で私の心に深く突き刺さった印象深い内容と、この文の題名である「徐京植の著作を通じてみた韓国社会、文学、その影響と刺激」という主題を中心に構成されています。色々な面で不足した発表ではあると思いますが、寛容なお気持ちで聞いていただけると幸いです。

２．出会い

私の心に徐京植という存在が本格的に刻み込まれた契機は、『子どもの涙』（イ・モク訳、トルペゲ、2004 年）でした。私はこの本を通じて、在日ディアスポラ徐京植の実存、苦悩、傷に関して述べられている部分に強い印象を受けました。『子どもの涙』には、幼少年期を支配した徐京植の感性と読書、日常がもの悲しく広がっています。たとえば私の心を揺さぶった次の文章を、ゆっくりと再び読んでみたいと思います。

> いまも時折、散逸をまぬがれて本棚や押入れに残っている古い本を手にとってみることがある。落書きや手垢に汚れたページを繰っていると、子どもの頃の歓びや哀しみの感情までが胸底でざわざわざわと騒ぎ始める。成長への憧れとおそれ、自負と劣等感、希望と失意とがはげしく交錯した、あの日々（『子どもの涙』、トルペゲ、2004 年、17 頁)[2]

今読み返してみても、非常に文学的であり流麗な文章にして翻訳(韓国語翻訳:イ・モク)であると思います。この一節に接し、言語では形容できない大きな慰めと激励を受けました。時に劣等感、失意、不安、孤独が襲ってくると、そのたびに私は徐京植のこの文章をゆっくりと読んでみます。すると大変慰められるのです。私が好きな著者徐京植。今では誰よりも豊かな知性と深い思惟の力を込めたエッセイの品格を見せてくれる徐京植。そんな彼の少年時代、「成長への憧れとおそれ、自負と劣等感、希望と失意とが激しく交錯した、あの日々」のような、そうした憂鬱な瞬間があったという事実は、私のように平凡な人々にとって大きな慰めとなります。上で引用した文章に接して、私の少年時代の傷と劣等感がたくさん治癒される感覚を受けました。このような傷と失意、劣等感、おそれから自由な人間は誰もいないことでしょう。

---

[2] 訳注：日本語版は徐京植『子どもの涙』小学館、1998 年、7 頁。以下、引用文の翻訳にあたっては日本語版が存在する場合、日本語版から原文を引用する。

前の例文で紹介した徐京植の文章を通じて、1 人の人間の無限の可能性と知的成長について、そしてその誰も自由であることが出来ない希望と絶望の瞬間について考えてみます。彼は自身が少年時代及び青年時代に体験した傷と劣等感の深淵をじっと見据えました。そうであるがゆえに彼は、彼特有の淡泊で美しく、気品にあふれた文を書くことができるのではないかと思います。

『子どもの涙』の後に出会ったもう一冊の本は、『青春の死神』（キム・ソクヒ訳、創作と批評、2002 年）でした。次のような文章が私に迫ってきました。

> そのとき私はすでに 30 代半ばを過ぎていたが、父母がともに世を去ったばかりで、自分自身には家族も定職もなかった。私にあるものといえば、延々と続く勝利の期しがたい闘争、果たせなかった望み、成就しなかった愛、もがけばもがくほど傷つけ合うほかない人間関係、穴底のような孤独感と憂鬱、そういうものだけだった。自分は卑小であるという思いに執拗に苛まれながら、それでも、この世界において何ものかでありたいという欲望を断念しきれなかった。どう生きればいいのだろう？……いくら考えてもすべてが漠としていた。死にたいと思い詰めることはなかったが、死がつねに自分のかたわらで息づいているように感じていた。(「青春の死神」、前掲『青春の死神』75 頁)[3]

この一節を読んだ時、私は熾烈な文学論争を体験して大きな傷を受けた状態だったということを記憶しています。壊れた人間関係、主流の文壇の方に発ってしまった仲間、そして当時文学界で感じた絶望と幻滅などにより、慢性的な憂鬱と孤独が私を取り巻いていました。だからでしょうか。徐京植のこのような心情があまりにも切実に迫ってきました。

『子どもの涙』との出会い以後、私は徐京植教授の愛読者となって、韓国語で翻訳された彼のすべての書籍と論稿、コラムを熱心に探して読むという運命を辿ることになりました。その運命は、『私の西洋美術巡礼』に始まって『子どもの涙』、『ディアスポラ紀行』(2006)、『時代の証言者』、『プリーモ・レーヴィへの旅』(2006)、『詩の力』(2015)等を経て、最近の『責任について』(2019)、『私の英国人文紀行』(2019)に至るまで、徐京植の著作を順次読んでいくことに幸いにも繋がっていきました。

その間に読みふけった徐京植の著作を通じて、私は韓国語で発表されたどのような文学作品に劣らず、密度のある知性と思惟の力、激しい思索の後の爽やかな憂愁、淡泊ながらも深みがあって余韻の残る文体、時代に向き合う人間の運命に対する悲しみを感じました。彼の書籍と論稿を通じて、文芸評論家である私に、エッセイを読む上でのまた 1 つの見識と基準が形成されたと言えるでしょう。

2006 年 6 月 17 日、淑明女子大において開かれた韓日民族問題学会主催の講演会で彼に初めて会いました。 徐京植教授は、「ディアスポラと言語：在日朝鮮人の立場で」という主

---

[3] 訳注：日本語版は『青春の死神：記憶のなかの 20 世紀絵画』毎日新聞社、58 頁。

題で尹東柱の詩と翻訳について講演をおこないました。尹東柱の「序詩」について、ぎこちない韓国語と、時々の日本語とで話す彼の姿があまりにも印象的でした。講演後の彼との対話を通じて、実直な態度に強い印象を受けました。振り返ってみると、その後に過ごした時間は、徐京植の書き物と人生をまるごと理解するための過程であったと思います。彼が韓国を訪れる時、あるいは私が日本を訪れるたびごとに、たびたび会って様々な対話を交わしました。また、徐京植教授が勤める東京経済大学で 2015 年 1 学期に客員研究員として過ごした理由も、彼の文章と人生をしっかりと知りたいという熱望からでした。当時徐京植教授が主催するセミナーには、朝鮮大学校の在学生と卒業生も含まれていて、彼らと「在日朝鮮人」を主題に色々と対話をおこないました。日本社会で彼らが体験した差別、悲しみ、傷に接して、その間私が十分に認識できずにいた視座について考える機会を得ました。

3.　韓国社会で徐京植の文章が持った意味

それでは、韓国社会で徐京植の文章が持った意味についていくつか申し上げてみたいと思います。まず、徐京植教授の著作は、相対的に日本社会より韓国社会で一層積極的に受容されてきました。ある出版社(創作と批評)は、徐京植教授について早くから「私たちの時代最高のエッセイスト」と表現しています。 合わせて、「私も物書きとして一言だけ申し上げます。私は今まで日本でも着実に 10 冊以上本を出してきましたが、率直に言って、日本よりも翻訳出版された韓国の方に多くの読者がいます」(『境界で出会う』204 頁)、「韓国は大体日本よりも 2～3 倍程度の読者がいます」(2015 年 4 月 24 日、長野信州山荘での対話)と言及してきた徐京植教授の発言を参照する必要があります。おそらく生涯を通じて差別と植民地主義に抵抗した彼の立場こそが、韓国の知識社会に対して徐京植教授の著作が大きな反響を呼ぶ所以だと思います。

2 番目に、『ディアスポラ紀行』、『難民と国民の間』[4]、『ディアスポラの眼』、『歴史の証人、在日朝鮮人』[5]など、徐京植教授の著作は、韓国の知識社会において本格的に在日朝鮮人とディアスポラについての問題意識を喚起してきました。彼が複数の書籍において叙述したディアスポラ芸術家の苦難に満ちた「歴程」と、亡命者に近い橋渡し役の感性は、国家主義と民族主義の磁場から十分に離脱できなかった韓国社会に新鮮な衝撃と刺激を与えてくれました。韓国社会でその存在がきちんと知らされなかった「在日朝鮮人」が深い関心を集め、研究対象として浮び上がったのには、徐京植教授による貢献が大きかったと思います。彼は、「世界各地を旅して歩くようになって、およそ 20 年になる。振り返ってみれば、旅の途上で私が眼と心を惹きつけられる事物は、いつも、どこかディアスポラと関係していた。

---

[4] 訳注：日本語版は『半難民の位置から：戦後責任論争と在日朝鮮人』影書房、2002 年。
[5] 訳注：日本語版は『在日朝鮮人ってどんな人？：中学生の質問箱』平凡社、2012 年。

その理由は、私自身がディアスポラであるからだ」(『ディアスポラ紀行』13 頁)[6]と告白しています。これは、ある著者の書き物と問題意識が、その者自身の実存的アイデンティティと深い関連性を持つという事実を雄弁に語っています。

3 番目に、徐京植の文章は、日本社会だけでなく韓国社会のあらゆる矛盾と欠如について、複雑で息苦しい心情を伴って省みる機会を与えてくれます。徐京植の書籍、思惟との対話は、韓国社会、文壇、アカデミアの問題と現況について省みる大切な契機を提供してくれました。例えば次のような発言を挙げることができます。「私がここを訪れてから、華僑の人で大学教授や知識人になった人がいれば必ず会ってみたいという話をしたことがありますが、いないと言われました。大韓民国社会が何らかの抑圧をおこなった結果ですよね?」(『苦痛と記憶の連帯は可能なのか』37 頁)。このような質問は、少数者に対する排除と抑圧の論理が支配する韓国社会の陰に、痛烈な形で目を向けさせます。今日では多少の改善がありますが、当時は華僑、ディアスポラ、難民、少数者に対する偏見と排除が支配していた韓国社会、その社会をめぐる複雑で息苦しい状況が、この質問によって端的な形で露見しました。徐京植自身がある社会の少数者でありディアスポラであるため、このような問題意識をより一層鋭敏に意識していたのでしょう。在日朝鮮人ディアスポラという「外部」の位置で発話された徐京植の散文は、韓国社会の「内部」にいる人々がそれまで認識することの出来なかった現状と矛盾、活力と偏向を正確に看破しているという点に注目しなければなりません。そのような意味で、在日ディアスポラエッセイストである徐京植の散文は、同時代韓国社会(文化)の現実と偏向に改めて照明を当てる、重要な他者としての役割を果たしています。

4 番目に、思惟の力と深い知性、人生に対する真剣さを伴った徐京植のエッセイは、軽いヒーリング中心のエッセイがほとんどである韓国社会の読書のあり方に、有意義な刺激と影響を与えてくれました。エッセイはどんな文章よりも筆を握る主体の問題意識と感性、思惟の表情、心の模様が繊細にあらわれます。徐京植によれば、良いエッセイはいつも「私」を疑うものであり、悪いエッセイは「私」を何ら疑いもしない、そのような安易なものです。彼のエッセイは、死、希望、発展、国家、民族、進歩などに対するなじみ深い通念を転覆させます。このように徐京植のエッセイには、澄みわたった覚醒と深い余韻、真剣な思惟の力、孤立をおそれない心が込められています。人間の悲しみと歴史の悲劇をじっと見据える徐京植のエッセイとの出会いを通じて、この社会の知識人たちは、新鮮な衝撃と痛烈な刺激を受けたということができるでしょう。

4.　文学

徐京植の著作において登場する主題は、美術、音楽、ディアスポラ、在日朝鮮人、日本社会、本、家族、民族主義／脱民族主義など非常に多様です。ここでは、「文学」に焦点を置

[6] 訳注：日本語版は『ディアスポラ紀行』岩波書店、1 頁。

いて徐京植の執筆活動と思惟について見てみたいと思います。

彼は、「〔大学進学を控えた状況で〕私は文学に対する漠たる希望（幻想というべきか）があった。文学ではメシが食えないことは承知していたが、なんとか文学に関わる分野に潜り込んで生きていきたいと思っていた。というよりも、正直にいえば、それ以外の選択肢がなかった」（『詩の力』32 頁)[7]と述べました。『子どもの涙』によれば、彼は少年時代から詩人になることを熱望したし、早稲田大学在学時代でも専攻がフランス文学でありました。徐京植は、2015 年 5 月 12 日に実現した私との対話を通じて、「本当に良い文学は、どうにかその世界に私も入りたいという憧憬を呼び起こす、そのような種類の文学だ。若い日、私もそのような文学の世界に属したかった」と告白したことがあります。

このように見れば、彼が文学を専攻して作家になったことは一種の運命ではないかと思います。当時は今より作家、文学、執筆活動が文化の中心であったし、文学に対する期待と幻想が生きていた時代でもあったでしょう。

詩人の感受性、文学に対する幼い時からの愛情と感覚は、徐京植の文章が持つ特徴と魅力を説明するための要素です。このように述べたらどうでしょうか。美しいエッセイは、概して社会的問題に無関心で、逆に社会的問題に関心を傾ける鋭利なエッセイは美学的には劣る場合が多いと言えます。これに比べて徐京植のエッセイは、政治的妥当性と美学的品格の結合に成功しています。尖鋭な政治的アジェンダ(agenda)を扱いながらも、深いペーソスと悲しみ、魅力的な文体で満たされた徐京植の文章は、読者にとって格別の魅力があります。元は日本語で発表された文章だという点を勘案すれば、徐京植の文章が「翻訳」という回路を経てもなお、どれほど強い発信力と普遍性を発揮しているのか、ということを改めて実感することになります。

このような境地がどのように可能だったでしょうか。『詩の力』に収録された「私はなぜ物書きになったのか」に登場する、次の一文を注意深く読んでみる必要があります。

> よく知られた韓国政治犯の弟がヨーロッパに気休めの旅に行ってきた報告――万が一にもそんな読まれ方をされるのはいやだった。私が政治犯の弟であることは事実であり、その立場を逃れることはできない。それは承知しているが、表現活動の次元では、私の独自性、私ならではの主体性を発揮しなければならない。たとえ批判をうけることになろうと、政治犯誰彼の弟でなく、徐京植という個人の存在を読者に刻みつけたい、そう願ったのだ。(『詩の力』51 頁)[8]

上の例文には彼だけの独自の表現活動、すなわち執筆活動において個性と主体性を持とうと渇望する徐京植の切実な意志が表われています。このような渇望は徐京植をして、書き

---

[7] 訳注：日本語版は『詩の力：「東アジア」近代史の中で』高文研、2014 年、26 頁。

[8] 訳注：日本語版は同上、46 頁。

物の主題に劣らず、文体と表現に対する多大な関心へと導かしめたことでしょう。言うなれば徐京植は、単に真っ当な文を書くということから一歩進んで、彼だけが書ける固有の文を書きたかったのでしょう。彼が 1995 年、『子どもの涙』で「日本エッセイストクラブ賞」を受賞したという事実、その受賞の理由が「ずば抜けた日本語表現」にあるという点は、徐京植の文体、文章が日本の評論界でも明確に認められたという事実を端的に表しています。実際、内容も内容ですが、清潔で淡泊な文体こそが徐京植の散文の格別の魅力であると思います。翻訳本においてもその率直ながらも激しい省察と美しい文体が感じられるくらいなので、原文ならばより一層その文体の魅力が大きく迫ってくるのではないでしょうか。私はその原文の魅力を余すところなく感じるために、引き続き日本語の勉強をしたいと思っています。

徐京植は『難民と国民の間』(2006)において、次のように述べたことがあります。「サイードは『滅亡する運命であることを知っている』、それにもかかわらず『私たちは前に進みたい』と話す。『ほとんど勝算がないにも関わらず引き続き真実を述べようとする意志』について述べました。あたかも一編の詩のような話だ」[9]。まさにこの言葉が心に突き刺さりました。私の人生にも、こうした論争や選択をすれば、結局は孤立するだろうということ、傷を受けるだろうということを予感しながらも、そのように進むほかはないという瞬間がありました。そのような孤独な時に、上の引用文を心に刻んだりもしました。ここで「一編の詩」が持った意味は、『詩の力』において彼が表現したこと、「思うに、これが詩の力である。つまり勝算の有無を超えたところで、人から人へなにかを伝え、人を動かす力である」[10]という言葉と繋がります。私はこのような態度から、形容できない感動と魅力を感じました。このような境地と態度を、話や言語で表現するのは十分に可能でしょう。しかしある社会の少数者の立場において、正義へと向かうその大胆な孤立と敗北を自ら実践するのはどれほど過酷な道のりでしょうか。そのような道のりを前にして私は感服するのです。

徐京植にとってあるべき詩というのは、このように敗北するだろうと予感をしながらも、書かずにはいられない何等かの運命的な情緒と、道があって行くのではなく、何の道も見えなくともそのまま行くほかはない態度を伴うものです。そうであれば彼は、この時代の文学の役割と文学の可能性についてどう考えているのでしょうか？　彼は、文学の啓蒙的にして批判的な役割は、どれほど果たし得ると考えているのでしょうか？　『詩の力』の後記、「『後ろ向き人間』の抵抗」において徐京植は、このように書いています。

「文学」が抵抗の武器として有効なのかどうか、疑わしい。私が書くものが「文学」と

---

[9] 訳注：日本語版は前掲『半難民の位置から：戦後責任論争と在日朝鮮人』。ただし本引用文は韓国版のみに収録（「途切れることなく真実を語ろうとする意志」、『難民と国民の間』トルペゲ、2006 年）。

[10] 訳注：日本語版は前掲『詩の力：「東アジア」近代史の中で』、114 頁。

呼びうるかどうかはなおさら疑わしい。それでも、こんな本を出そうとするのは、本書の中で魯迅の言葉を借りて述べているように、勝算の有無を超えて、「人が歩くと道ができる」からだ。まだ歩けるうちは歩くしかない。（『詩の力』277 頁)[11]

青春時代、金芝河（キム・ジハ）の「燃える喉の渇きで」をはじめとして、申東曄（シン・ドンヨプ）、高銀（コ・ウン）、申庚林（シン・ギョンニム）などの詩を通して祖国の民主主義と抵抗の可能性を模索した彼が見るに、もはや抵抗の武器としての文学の可能性は疑わしいというのです。率直な告白に違いありません。それにもかかわらず、文学の役割が消失したということはできないということ、たとえ以前のように文学が即時的な抵抗の声や啓蒙的役割を担当することはできなくても、文学が引き受けなければならない固有の役割が相変らず存在するということ、海の中に流したガラス瓶に入っている手紙のように、誰かは相変らず文学（詩）の役割を切実に期待している。このことが、徐京植が読者に終始伝えようとするメッセージなのではないかと思います。私は徐京植のエッセイが、その文学の役割をしていると考えます。

5.　おわりに ── 希望と虚無の間

徐京植の翻訳散文集はいつも私に、読書の熱望とときめき、苦痛、涼やかな緊張という、稀有な体験を与えてきました。凄然な悲しみと虐殺、亡命、死、深い苦悩、真剣な知性の饗宴で満たされた彼の散文集を読む過程は、常に苦悩を伴います。しかし徐京植の著作を読む時間は、胸が詰まるような余韻、根本的な考えの道筋を残してくれます。「私はなぜこんなにも徐京植のエッセイに惹かれるのだろうか?」という問いを立ててみたいと思います。時代と人間の痛みと傷に対して切々と共感する心、尖鋭な論点を扱いながらも淡泊で美しい文体など、いくつかの理由を探すことできるでしょう。ここにつけ加えて私は、生涯を境界に立つ人として生きてきた彼の生そのものが、このように美しくも悲しい思惟の力が込められた文章を書かせる原動力なのではないのかと思います。ディアスポラであり、ある社会の少数者として、差別、歴史的な傷と苦悩を目の当たりにし、そして潜り抜けた徐京植だからこそ、こうした文を書くことができたのでしょう。

もちろん、明らかに幸運が作用したとも言えるでしょう。徐京植は、2015 年に何回にかけて成り立った私との対話において、その幸運について繰り返し強調したことがあります。「今、このように物を書いて私の本が祖国に翻訳されている状況を考えてみれば、私はあまりにも幸運児です。兄も『お前は運が良い奴だ』と話したことがありますが、私自身もそう思います」(2015 年 4 月 24 日)、「私は幸運を得たので、その幸運の結果物を私個人が独占してはいけないと考えます。母、父、兄妹、家族、多くの在日朝鮮人、不幸に去っていった

[11] 訳注：日本語版は同上、252～253 頁。

数多くの先輩と後輩達の視線を常に感じています」(2015 年 8 月 5 日)、「多くの在日朝鮮人は、私と同じこのような機会を想像もできないでしょう。彼らも自らしたい話がたくさんあるはずなのに、そのような機会を得られなかった人が大部分です。私を取り巻く幸運をよくわかっているので、最善を尽くしてできるだけ正直に申し上げようと努力してきました」(2015 年 8 月 17 日)。自身に与えられた幸運を冷徹に認識したゆえにこそ、彼は「私は不幸に生きて、不幸だという話も出来なかった人々の側に立ちたいです」(2015 年 8 月 17 日)と述べたのでしょう。私はこのような態度が、単に儀礼的な謙遜ではないと思います。徐京植らしい態度だと思います。

この文を書いている今年の最後の日の時点で振り返ってみると、2020 年は憂鬱と悲観で綴られた 1 年だったと思います。コロナ 19 の事態がなくとも、世界のあちこちで新たな野蛮と後退を目撃することになりました。現在の韓国でも、改革政権は、政権運営の序盤期に比べて非常に難しい状況に直面しています。政権の持つ諸々の限界、人事の失態という機会を利用した、極右勢力をはじめとする保守陣営の総反撃が展開されています。こうした現象が、ブラジル民主政権の没落と同じような惨めな結果には繋がらないだろうと大言壮語もできないでしょう。全世界的な次元の気候変動とコロナ 19 に加えて、韓国と日本、どちらも急激な人口減少、大学の没落、進歩陣営の危機、極右派の浮上という場面に直面しています。偏狭な陣営論理がますます激しくなっていて、自身と異なる立場を持った他者に対する憎しみと軽蔑の感情が増幅されています。

このような現実を目撃するたびに、徐京植の悲観的現実認識が強い共感となって迫ってきます。時に退行する世界と現実に対する幻滅に会えば、私たちは深い虚無に陥るようにもなります。徐京植は 2015 年 5 月 12 日の対話において、「『進歩の虚偽』まで見抜く感覚としての虚無主義が必要だ。真の虚無主義者は、自分自身も安全地帯にそのまま置かない。転向を合理化する虚無主義でなく、世の中をさらに深く、正確に見る意味での虚無主義、支配勢力と戦う人々に対して簡単に冷笑しないで、権力者を最後まで批判する感覚を持った虚無主義が本当の虚無主義である。そのような意味で私は虚無主義者である」と述べたことがあります。こうした省察的な虚無が、彼をして引続き物を書かしめる力になっているのではないでしょうか。徐京植は、青春時代、次のように告白したことがあります。

> 兄たちが監獄にいる時、本人たちがどう思っていたか知らないが、率直に私は特に内容も根拠もない激励、『ああ、明日には良い日がくるでしょう』という話が一番聞きたくありませんでした。凄惨で残酷で希望が殆どない状況を正しく見ないで、安易に慰労のみを求めようとする私自身の弱気なところも嫌いだったし、また、ひとをそのような形で慰めて自己満足に浸る人々も嫌いでした。(『苦痛と記憶の連帯は可能なのか』163 頁)。

彼は最近の著作でも相変らず空虚な希望とは明らかに距離をおいたまま、深い悲観の中で時代の退行を明確に見据えています。「現在、全世界に広がっていく知的荒廃」(『私の書

斎の中の古典』194 頁)、「自分は相変わらず悲観的であるが、その悲観の質がすこし変化していることに気づいている。むかしの私は自分が陰湿な暗い地下室に閉じ込められており、どこにも出口がないと感じていた。いまの私は、こんなにも長い歴史を経て、こんなにも多くの残酷を経験したにもかかわらず、人間がすこしもよくならなかったということを悲観しているのである」(『私のイタリア人文紀行』51 頁)[12]、「あらゆる場所で、あらゆるものが急速に浅薄になっていく。優れた人々、善き人々は去っていく。要するに、過ぎ去るのだ」(『私のイタリア人文紀行』279 頁)[13]。このような表現を記憶します。

私は徐京植の深い悲観主義を目撃するたびに、「私たちに希望が与えられるのは、希望が全くなかった人々によってである」という、ヴァルター・ベンヤミンの閃光のような言葉を想起します。ベンヤミンの言葉は、ファシズムが横行した 20 世紀前半だけでなく、現在のこの時代にも依然として有効だと思います。それならば、逆説的な意味で私たちの時代に残ったその一筋の薄い希望の光は、徐京植の深い絶望に誠実に向き合うことから見出されるべきではないでしょうか。

私たちは皆、「果たして私はまともに生きていっていると言うことができるだろうか。人類社会は良くなっていると言うことができるだろうか」という徐京植の問いから自由でないでしょう。思うにあなたのこのような懐疑と問いこそが、あなたの思惟を支えてきた基本的な態度なのでないかと思います。

徐京植は「私はなぜ物書きになったのか」(『詩の力』)の終盤で、「私に残った時間がどれくらいになるのかは予測できないが、「物を書く」という行為を通じて私の役割を成しとげ、この課題を共有する者たちと連帯したい」と述べました。私には彼のこの希望があまりにも切々と迫ってきます。願わくは、彼がいつも元気でいてくれて、この美しい連帯の責務が成功裏に成しとげられることを心の底から望みます。

最後に、この大事な席で発表の機会をくださった方々が示してくれた深い連帯と友情の心を、私の心にいつまでも記憶します。本日共にしたこの時間を永遠に忘れません。そして、ようやく真の自由人になられた徐京植教授にお祝いの心をお伝えしたいと思います。至らない発表を最後まで傾聴してくださってありがとうございました。

（洪昌極 訳）

---

[12] 訳注：日本語版は『メドゥーサの首：私のイタリア人文紀行』論創社、2020 年、36 頁。

[13] 訳注：日本語版は同上、145 頁。